



Title	アラブ伝統文法におけるmaf'ulの下位範疇：イブン・アッサッラージの分類とそれ以降の変遷
Author(s)	岡崎, 英樹
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2003, 3, p. 15-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105831
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラブ伝統文法における maf'ul の下位範疇 —イブン・アッサラージの分類とそれ以降の変遷—

岡崎 英樹*

The Subcategory of maf'ul in Arabic Grammatical Tradition —Ibn as-Sarrāğ's Classification and the later Transition—

The term maf'ul in Arabic grammatical tradition is normally taken to denote the semantic category “patient” or the syntactic category “object”. However, it can be noted that when the term is used by itself, it occasionally means any of the five types of objects; maf'ul muṭlaq “absolute object” (lit. the accusative which is denoted by the word maf'ul only, without adding a restrictive phrase which is a combination of a preposition + genitive), maf'ul bi-hi “direct object” (lit. that to which the act is done), maf'ul fī-hi “locative object” (lit. that in which the act occurs), maf'ul la-hu “reason object” (lit. that on account of which the act is done), maf'ul ma'a-hu “accompaniment object” (lit. that with whom the act is done).

Ibn as-Sarrāğ's major 10th century work, *Kitāb al-'Uṣūl*, which was considered by later philologists to be the turning point in the Arabic grammatical tradition, is one of the oldest grammatical works that demonstrate these five objects, using obvious terminologies and distinguishing between the object and the “pseudo”-object (muṣabbah bi-maf'ul). One may say that the greatest value of his treatise is the classification of each grammatical category based on the principles of comprehensive divisions and the arrangement of the chapters according to this classification.

The aim of this paper is to examine how the classification by Ibn as-Sarrāğ concerning the object and pseudo-object has been accepted by Arab grammarians such as az-Zağğāğī, Ibn Ġinnī and al-Ġurġānī. In addition, it can be pointed out that there was relatively little reconsideration of this classification as well as the use of terminologies, at least after the 13th century; this is particularly the case in al-'Astarābādī's *Šarḥ al-Kāfiya*, Ibn Mālik's *al-'Alfiyya* and his successors' treatises.

1. はじめに

アラブ伝統文法における文法用語 maf'ul は、異なる文法レベルにおいて様々な意味で用いられる。まず、語彙論及び形態論においては「動詞第 I 形受動分

* 四天王寺国際仏教大学 講師

詞の語形」を示すのに利用される。また、統語論及び意味論においては、動詞・分詞・動名詞の作用を受けて対格をとる「目的語, object」や、動詞の示す動作・行為を受ける「被動作主 (受動者), patient」を指すのにも用いられる。さらに、受動文の主語も、13世紀以降 *an-nā'ib 'an al-fā'il* と呼ばれるようになるまでは、*maf'ul* と位置づけられていた¹⁾。動詞の「直接目的語」に関しては、*maf'ul bi-hi* という用語があるが、実際には *maf'ul* と省略した表現が用いられることが多い²⁾。*maf'ul bi-hi* に加えて一連の対格の用法があり、それらは *maf'ul* で始まる用語によって各々が区別される。例えば「同属目的語 (*maf'ul muṭlaq*)」「原因を示す動名詞対格 (*maf'ul la-hu*)」「時・場所を示す名詞対格 (*maf'ul fi-hi*)」「接続詞 *wāw* が“～とともに”を意味する場合に対格をとる後続名詞 (*maf'ul ma'a-hu*)」があり、これらを総称して *maf'ul* と呼ぶことがある。つまり、統語論や意味論の文脈で文法用語 *maf'ul* が用いられた時、上記の下位範疇のどれかを指している場合もあるため、*maf'ul* に「目的語, object」という単一の訳語を与えて解釈するだけでは十分とは言えない。このように *maf'ul* という文法用語が持つ多義性に加えて、文法家によってはその使用に一貫性のない点も指摘することができる。また、同一の文法家が書いたものでも、文脈によって異なる解釈をすべき場合もある³⁾。このような理由から、本稿では *maf'ul* という文法用語に取って訳語を与えずに、そのまま用いることにする。

maf'ul に分類されるものにはどのような文法現象があるのかを明確に示し、各々に文法用語を付けて記述している文法書のうち、最も初期のものに、イブン・アッサラージ (Ibn as-Sarrāğ, d. 928) の『*Kitāb al-'Uṣūl*』⁴⁾ がある。「バグダードにおける文法研究の黄金期 (Troupeau 1962:318)」とされる10世紀に書かれ、『*al-'Uṣūl*』によって正常な状態にするまでは、文法はずっと混乱状態にあったと言われる (Mu'ğam al-'Uḍabā' V:341, Buğya I:109)」と、後に文法学の転換点と評されることになるこの書の特徴づけているのは、なにより各文

1) 主な文法家を用いる受動文の主語を指す用語については、岡崎1994:16を参照。なお、*an-nā'ib 'an al-fā'il* はイブン・マリークの造語であると言われている。Carter 1990:135.

2) *maf'ul bi-hi* と *maf'ul* が厳密な使い分けをされずに用いられる例については Mosel 1975:256, Owens 1989:218などに指摘されている。

3) *maf'ul* の多義性・曖昧性については Peled 1999 を参照。スィーパワイヒには通常「受動分詞」を指す *ism l-maf'ul* を「被動作主」の意味で用いる箇所がみられる (al-Kitāb I:16)。また、アッザッジャージーが用いる *fā'il* と *maf'ul* の用語に関して、al-Ğumal:17 と al-'Īdāh:48 とでは違う解釈をすべきとの指摘がある。Versteegh 1977:59, 1995:57,59

4) ベイルート版 al-Fatḥi 校訂本のタイトルは『*al-'Uṣūl fi an-Naḥw*』であるが、本稿ではイブン・アッサラージ自身が用いる呼称に統一した (al-'Uṣūl I:343, II:234)。また、後世には『*Kitāb al-'Uṣūl al-Kabīr*』とも呼ばれ、『*Kitāb Ğumal al-'Uṣūl* (別名『*Kitāb al-'Uṣūl as-Ṣağīr*』)』と区別される。

法事項の徹底的な分類であると言えよう⁵⁾。この書に記述されている「maf'ul」と「maf'ulに類するもの(mušabbah bi-maf'ul)」のそれぞれの分類は、後の文法家の記述の中においても、多くがそのまま受け継がれてゆく。

本稿では、「maf'ul」及び「maf'ulに類するもの」の分類が、イブン・アッサッラージ以降の主要な文法書・教科書・注釈書等でどのように記述されてきたかを整理し、変わらずに受け継がれたものと、時代とともに変化したものとをそれぞれまとめてみたい。

2. イブン・アッサッラージ以前のmaf'ulに関する記述

8世紀から9世紀までの文法書においても、後にmaf'ulに分類されることになる文法現象はすべて網羅されてはいる。しかし、それらすべてに文法用語が与えられていないという点、maf'ulの下位範疇が明確に示されていない点、分類に基づく系統だった章立てが十分ではない点などを考えると、10世紀以降の文法書との違いは大きいと言えよう。maf'ul及びそれに類するものをめぐる文法用語に関して、8世紀のシーバワイヒ(Sibawayhi)の『al-Kitāb』では、用例は豊富に提示されてはいるが、後の文法書等で広く用いられることになる「maf'ul muṭlaq」と「tamyīz」の2つの文法用語は見られない⁶⁾。

9世紀のアルムバッラド(al-Mubarrad)の『al-Muqtaḍab』では「tamyīz」の用語が見られるが⁷⁾、シーバワイヒと同様、「maf'ul muṭlaq」の用語は見い出せない⁸⁾。また、「maf'ul又は形式的・意味的にmaf'ulに類するものでなければ、対格をとることはない。(al-Muqtaḍab IV:299)」と公式化し、対格の用例を列挙してはいるが、maf'ulとそれに類するものとの区別は明確にしていない。

なお、9世紀のクーファ学派を代表するアルファッラー(al-Farrā')の『Ma'āni al-Qur'ān』に関しては、maf'ulという用語自体、ごくわずかの箇所にしか現れないとの指摘がある(Owens 1990a:160)。

また、イブン・アッサッラージによって「maf'ulに類するもの」の一つに分

5) イブン・アッサッラージの分類(taqsim)全般については、Troupeau 1962:398, 1983:143, Versteegh 1977:124, Owens 1988:28, Bohas & et.al 1990:10などを参照。

6) シーバワイヒは同属目的語として用いられる動名詞をḥadaṭと呼ぶ(al-Kitāb I:11)。また、2つの文法用語が欠落している点については多くの研究者が指摘している。Carter 1972:489, 1981:385, Troupeau 1976:164, 198, Levin 1979:194, 1991:917, Owens 1990a:128, 161, 1990b:257, 1991:231, Peled 1999:62

7) tamyīzと並びtabyīnの用語が見られる(al-Muqtaḍab III:32, IV:299)。この点についてはOwens 1990:121, 127参照。

8) アルムバッラドは同属目的語として用いられる動名詞をmaṣḍar又は'ism al-fi'lと呼ぶ(al-Muqtaḍab IV:299)。

類される「kānaとその姉妹語」の位置づけについても、9世紀以前と10世紀以降とでは相違がみられる。スィーバワイヒは、動詞 kāna を ḍaraba と同様に他動詞であるとし⁹⁾、アルムバッラドも「(kānaなどの動詞は) ḍaraba と同様に真正動詞 ('af'āl ṣaḥiḥa) である。(al-Muqtaḍab IV:86)」と述べている。これに対してイブン・アッサッラージは、kāna とその姉妹語を非真正動詞と位置づける¹⁰⁾。

3. イブン・アッサッラージによるmaf'ūlの分類

『Kitāb al-'Uṣūl』のうち、いわゆる統語論を扱う部分の構成は、品詞レベルでは「名詞」「動詞」「不変化詞」の順に解説がなされ、そのうち名詞については「主格」「対格」「属格」の順に解説される。この点は、その後の多くの文法書と大差はない。maf'ūlの分類に関しては、「対格」の解説の冒頭 (al-'Uṣūl I:159) で言及がなされる。彼は、名詞対格 (al-'asmā' al-manṣūbāt) の中に、「maf'ūl」と「maf'ūlに類するもの」という二つの枠組みを設定している。maf'ūlについては、「5つに分類される。すなわち、maf'ūl muṭlaq, maf'ūl bi-hi, maf'ūl fī-hi, maf'ūl la-hu, maf'ūl ma'a-huである。(ibid.)」と述べ、5つの下位範疇があることを明確に示している。そして、この順序に従って章立てがなされている。

- (1) qum-tu qiyām-an. (maf'ūl muṭlaq)
- (2) ḍarab-tu zayd-an. (maf'ūl bi-hi)
- (3) qum-tu l-yawm-a. (maf'ūl fī-hi: ḡarf az-zamān)
qum-tu 'amām-a-ka. (maf'ūl fī-hi: ḡarf al-makān)
- (4) ḡi'-tu-ka maḥāfat-a fulān-in. (maf'ūl la-hu)
- (5) mā zil-tu 'a-sīr-u wa n-nīl-a. (maf'ūl ma'a-hu)

一方の「maf'ūlに類するもの」に関しては、上記の maf'ūl のように列挙されていないため、下位範疇がいくつあるのか明確に表現されていない。したがって、数箇所分散している記述から解釈する必要がある。Owens 1988:167-8はイブン・アッサッラージの分類した「maf'ūlに類するもの」¹¹⁾を「ḥāl」「tamyīz」「istiṭnā'」の3種類であるとしている。これに対し、Yūsuf 2000:41は「kānaとその姉妹語の補語」と「innaとその姉妹語に後続する文の主語」を加えて5種類であるとして

9) Levin 1979:186 には、この点でスィーバワイヒと後の文法家との見解が異なることが指摘されているが、イブン・アッサッラージの見解は触れられていない。
10) アルムバッラド及びイブン・アッサッラージによる「真正動詞」と「非真正動詞」の区別は、Taha 1995:106, 127, 302ff.参照。
11) Owens は muṣabbah bi-maf'ūlを“pseudo-object”と英訳するが、この場合の maf'ūl は“動作主によって行われた行為・動作”あるいは“動作主の行為によって生じたもの”等を意味し、“目的語”と解釈すべきではない。

いる。イブン・アッサッラージの記述や、後のイブン・ジンニー (Ibn Ġinnī)、アルジュルジャーニー (al-Ġurġānī) らの記述を照らし合わせてみると、Yūsufのように5種類の「maf'ulに類するもの」を想定していると解釈するのが妥当であると思われる。

イブン・アッサッラージは、まず、「maf'ulに類するもの」を、名詞対格と主語との意味的關係から二つに大別する (al-'Uṣūl I:212)。一つ目は「形式的に対格となるもの (maṣṣūb) が主格となるもの (marfū') と意味的に同一である場合」である。二つ目は「形式的に対格となるものが主格となるものとは同一でなく、その一部である場合」である。

上記の一つ目は、作用語 ('āmil)¹²⁾ の種類によってさらに3つに分類される。「作用語が真正動詞 (fi'l ḥaqīqī)¹³⁾ の場合」としてḥālとtamyizをあげる (ibid.:213)。次に「作用語が真正動詞ではないが、動詞と同様の語形変化をする場合」としてkānaとその姉妹語の補語をあげる (ibid.:228)。次に「作用語が語形変化しない辞詞 (ḥarf ġāmid ġayr mutaṣarrif) の場合」として'innaとその姉妹語に後続する文の主語をあげている (ibid.:229)。

上記の二つ目は、細分化せず、mustaṭnā¹⁴⁾ がこれに属するとしている。また、「mustaṭnāはmaf'ulに類似するものである。(ibid.:281)」との表現もみられる。

以上の記述から、イブン・アッサッラージは「maf'ulに類するもの」を「ḥāl」「tamyiz」¹⁵⁾ 「kānaとその姉妹語の補語」「'innaとその姉妹語に後続する文の主語」「mustaṭnā」の5種類があると考えていたと解釈されよう。

- (6) ḡā'-a 'abd-u l-lāh-i rākib-an. (ḥāl)
- (7) taṣabbab-a 'araq-an. (tamyiz)
- (8) kān-a 'abd-u l-lāh-i munṭaliq-an. (ḥabar kāna wa 'aḥawāti-hā)
- (9) wa l-lāh-i 'inna zayd-ān munṭaliq-un. ('ism 'inna wa 'aḥawāti-hā)

12) 'āmilの英訳には、“regent” (Wright II:275) “operator” (Carter 1981:37, Versteegh 1995:104) “governor” (Owens 1988:201) などがあり、ラテン語文法との関連性に対する見解などから学者によって訳語が異なる。ここでは「作用語」の訳語を与えた。

13) イブン・アッサッラージは、動詞を fi'l ḥaqīqī と fi'l ġayr ḥaqīqī とに分類する。「意味と時制を示しているもの」が fi'l ḥaqīqī であり、「主語が動作・作用を受けるもの (māt-a, saqat-a など)」や「時制のみを示すもの (kān-a)」は fi'l ġayr ḥaqīqī とみなす (al-'Uṣūl I:73-4, 82)。また、彼は「lays-a を不変化詞 (ḥarf) とみなした最初の文法家 (Šarḥ 'Ibn 'Aqīl I:262n.)」とされることもあるが、彼自身は動詞であると明言している (al-'Uṣūl I:82)。なお、アッザッジャージーは kāna とその姉妹語を ḥarf と呼ぶ (al-Ġumal:53)。

14) 章のタイトルとしては 'istiṭnā' を用いる。al-'Uṣūl I:290, 295

15) tamyiz と tabyīn を併記する箇所 (al-'Uṣūl I:248)、tamyiz と tafsīr を併記する箇所 (ibid.:54)、mumayyaz や mufassar の用語が現れる箇所 (ibid.:308) もあるが、tamyiz が38回と最も多く用いられる。

(10) ḡā'-a-nī l-qawm-u 'illā zayd-an. (mustaṭnā ('istiṭnā'))

なお、章立てとの関連で言えば、「maf'ūl」と「maf'ūlに類するもの」のそれぞれ5種類の下位範疇について、「kānaとその姉妹語の補語」¹⁶⁾を除けばすべて「対格」の文脈の中に組み込まれている。「kānaとその姉妹語の補語」は「主格」の中のmubtada'とḥabarの文脈で解説がなされており、他の対格との関連性がわかりにくい構成になっている。しかし、kānaを用いた文について「彼らは動詞文の主語 (fā'īl) に類似するものとして名詞文の主語 (mubtada') を主格にし、動詞文の目的語 (maf'ūl) に類似するものとして〔名詞文の補語 (ḥabar) を対格にした〕¹⁷⁾ (al-'Uṣūl I:82)」との表現が見られ¹⁸⁾、mubtada'とḥabarから成る名詞文が根底にあることを示しつつ、述語が対格をとる点をmaf'ūlとの類似性から説明している。なお、動詞 kāna を用いる構文の主語と述語は、それぞれ 'ism kāna 「ḥabar kāna」¹⁹⁾と呼び、「fā'īl」「maf'ūl」と呼ぶことはない。

以上で見たきた、イブン・アッサラージが考える「maf'ūl」と「maf'ūlに類するもの」のそれぞれ5つの下位範疇は次のようにまとめることができる。

maf'ūl

①maf'ūl muṭlaq ②maf'ūl bi-hi ③maf'ūl fī-hi ④maf'ūl la-hu

⑤maf'ūl ma'a-hu

maf'ūlに類するもの (muṣabbah bi-maf'ūl)

⑥ḥāl ⑦tamyīz ⑧ḥabar kāna wa 'aḥawāti-hā ⑨'ism 'inna wa 'aḥawāti-hā

⑩mustaṭnā ('istiṭnā')

4. 分類・章立てのための用語

『Kitāb al-'Uṣūl』における「maf'ūl muṭlaq」「maf'ūl bi-hi」「maf'ūl fī-hi」「maf'ūl la-hu」「maf'ūl ma'a-hu」という5つの文法用語は、主として各章のタイトルとして用いられ、各章の説明の部分では、ほとんどの場合、他の文法用語に置き換えられる。その結果、実際にはこれらの文法用語が用いられる回数は

16) 近年ではDayfのように「kānaとその姉妹語の補語」を「ḥāl」の章に組み入れて解説するという試みもある。(Taḡdīd an-Naḥw: 11-2, 184-5)

17) [] の部分は校訂者が付け加えたもの。

18) 同様の表現は後の文法家によっても広く用いられる。al-Luma': 15, al-Muqtaṣid I: 398, al-Mufaṣṣal: 72, 'Asrār: 138, al-'Inṣāf II: 836, Ṣarḥ al-Kāfiya II: 292, Ṣarḥ at-Tashīl I: 337, Ham' I: 353

19) Levin 1979: 186によれば、スィーバワイヒはḥabar kānaを al-Kitāb I: 63で一回しか用いていない。イブン・アッサラージの使用例を調べたところ 'ism kāna, ḥabar kānaとも多く用いられることが確認できた。'ism kānaの使用箇所は al-'Uṣūl I: 67, 83, 86, 254 など。ḥabar kānaの使用箇所は ibid.: 91, 118, 220, 228 など。

極めて少ない²⁰⁾。例えば、「maf'ūl muṭlaq」と「maf'ūl la-hu」は各章の始めにタイトルとしては用いられるが、説明の中では「動名詞 (maṣḍar)」に置き換えられる。したがって『Kitāb al-'Uṣūl』の中で「maṣḍar」は308回も用いられているのに対して「maf'ūl muṭlaq」は2回、「maf'ūl la-hu」は8回しか用いられていない。「maf'ūl bi-hi」についても、多くの場合 maf'ūl と略される。この結果 maf'ūl という文法用語が417回も用いられているのに対し、「maf'ūl bi-hi」が用いられるのは24回に限られる。同様に「maf'ūl fī-hi」も5回しか用いられず、「ẓarf al-makān」「ẓarf az-zamān」又は単に「ẓarf」²¹⁾と置き換えられて説明がなされる。このように、分類及び章立てのための用語と、説明のための用語を使い分けることは、結果として、隣り合う章どうしの関連性が明確になることにつながっている。また、章のタイトルに「maṣḍar」を用いないことによって、厳密な記述が確保されていると言える²²⁾。

5. イブン・アッサラージの分類をめぐる疑問点

上述の分類に関して、「maf'ūl」と「maf'ūlに類するもの」とを区別する根拠は何かという疑問が残るが、これについてイブン・アッサラージは明らかにしていない。Owens (1988:296) は ḥāl, tamyīz, 'istiṭnā' という3つの「maf'ūlに類するもの」とされる名詞対格が、場合によっては意味的に動作主と解釈される点から説明を試みたが、最終的には区別をする文法的な根拠はないと結論付けている (Owens 1990a:161, 1991:230)。単に、用語が「maf'ūl」で始まるものを maf'ūl に含め、ḥāl, tamyīz, 'istiṭnā' のように用語に「maf'ūl」の語が付かないものを「maf'ūlに類するもの」に含めたということも考えられよう。

また、「maf'ūl」と「maf'ūlに類するもの」のそれぞれの下位範疇を“5つ”に分類して、「呼びかけ語に後続する名詞対格」や「絶対否定のlāに後続する名詞対格」²³⁾などを除外している理由も明らかにされていない。『Kitāb al-'Uṣūl』には「maf'ūl」や「maf'ūlに類するもの」の他にも、5つに分類される文法現象が

20) それぞれの文法用語が用いられる al-'Uṣūl の頁は以下の通り。maf'ūl muṭlaq I: 159 / maf'ūl bi-hi I: 35, 58, 99, 107, 122, 134, 159, 169, 171, 196, 206, 210, 212, 254, II: 18, 315, 317, 344, 345 / maf'ūl fī-hi I: 128, 159, 190, 218 / maf'ūl la-hu I: 159, 206, 208, 212, II: 344 / maf'ūl ma'a-hu I: 159, 209, 210, 212.

21) 「ẓarf al-makān」「ẓarf az-zamān」はともに10回づつ用いられる。「ẓarf」に関しては文法用語でない場合も含めて192回現れる。

22) アッシルビーニーは「maṣḍarは主格や属格をとる場合もある (Carter 1981:344)」との理由から、対格の用法の一つとしての「maf'ūl muṭlaq」というタイトルの付け方を支持している。

23) tamyīzの章の後に「nidā' (al-'Uṣūl I:329 ff.)」「nafy bi-lā (ibid.:379 ff.)」の章が設けられているが、maf'ūlに類するものから除外されている。

数多く見られる。たとえば、名詞主格 (al-'asmā' al-murtafi'a) は、「名詞文の主語」「名詞文の述語」「動詞文の主語」「受動文の主語」「動詞文の主語と形式的に類似するもの」の5つに分類される (al-'Uṣūl I:58)。また、「誓いを表し名詞属格を要求する語」を一般的でないものを含めて5つ (wa, bi, ta, li, min) に分類しているほか (ibid.:430)、「呼びかけ語」も5つ (yā, 'ayā, hayā, 'ay, 'a) に分類している (ibid.:329)。また、「'inna とその姉妹語」も彼以降のほとんどの文法家が'annaを含めて6つに分類している²⁴⁾が彼は5つ ('inna, lākinna, layta, la'alla, ka-'anna) に分類する (ibid.:229)。「maf'ūl」と「maf'ūlに類するもの」のそれぞれが、なぜ5つに分類されているのかという問題は、これ以外の5つに分類される文法現象との関連から、さらに考察する必要があると思われる。

また、イブン・アッサッラージの分類が、どの程度先人から受け継いだのかという点も、スィーバワイヒやアルムバッラドとの比較だけでは不十分である。バスラ学派を自認する²⁵⁾イブン・アッサッラージは、アルムバッラドの弟子の一人であり、多くの考え方をアルムバッラドやそれ以前のスィーバワイヒに負っている。たとえば、『Kitāb al-'Uṣūl』の中にみられる文法家たちへの言及を数えてみると、スィーバワイヒへの言及が411箇所あり、群を抜いている。次いでアルハリール (al-Halīl) が154箇所、アルムバッラド (「アブー・アルアッバース」と呼ばれる) が142箇所となる。しかしながら、maf'ūlの分類に関しては、先人の言葉の引用という形式をとっていないため、分類を彼自身が新たに行ったものなのか、それとも、スィーバワイヒ、アルムバッラド以外の文法家から継承したものかを断定できるほどの資料がないというのが現状である。

用語についても同じことが言える。maf'ūl muṭlaqという用語が確認できるのは『Kitāb al-'Uṣūl』以降であり、スィーバワイヒやアルムバッラドはこの用語は使っていない。しかし、イブン・アッサッラージが初めて使い始めたと断定することはできない。また、この用語が付けられた理由についても言及はなく、用語の定

24) イブン・マリークとアッスユーティールは'annaを含めず5つに分類する (Šarḥ at-Tashīl I:387, Ham' I:425)。大多数の文法家は6つに分類し、提示する順序も3番目と4番目のものが入れ替わっている点以外は同じである。「'inna, 'anna, lākinna, ka-'anna, layta, la'alla」の順に列挙するものは、al-Ġumal:64, al-Muqtaṣid I:443, al-Mufaṣṣal:292, al-Muqarrib:164, Qaṭr:162-3。また、「'inna, 'anna, ka-'anna, lākinna, layta, la'alla」の順に列挙するものは、al-Luma':17, al-'Awāmil:147, 'Asrār:148, Šarḥ al-Kāfiya II:345, Šarḥ 'Ibn 'Aqīl I:345-6。

25) バスラ学派の文法家を指し「'aṣḥāb-u-nā」と呼ぶ (al-'Uṣūl I:87, 151)。なお、『Kitāb al-'Uṣūl』でバスラ学派に38回、クーファ学派に62回の言及が見られる。これは、アルムバッラドの『al-Muqtaḍab』にバスラ学派に対する言及がわずかに5回程度 (Bernards 1997:14)、クーファ学派に対する言及が「バスラ学派以外の文法家たち」との表現で1回のみ現れる (Owens 1988:12, 268) ことと対照的である。

義も行っていないため、後の文法家の間で様々な解釈が生じるようになった。アルジュルジャーニーは、muṭlaq という語について「maf'ul bi-hi や maf'ul fī-hi などのように前置詞に支配されていないという意味である (al-Muqtaṣid I:580)」と解釈した。このような、用語自体の文法構造からの説明は、後の文法家にも多く見られるが、これ以外の解釈も存在する。イブン・ウスフル (Ibn 'Uṣfūr) は、「文法家によって異なる解釈がされる (Šarḥ al-Ġumal II:449)」とし、maf'ul muṭlaq、つまり動名詞 (maṣdar) は「動詞そのものに関連するものであるからこのように名づけられた」という説も紹介している²⁶⁾。

6. イブン・アッサッラージ以降の「maf'ul」と「maf'ulに類するもの」の分類

イブン・アッサッラージ以降の文法家においても、maf'ul の下位範疇とされた「maf'ul muṭlaq」「maf'ul bi-hi」「maf'ul fī-hi」「maf'ul la-hu」「maf'ul ma'a-hu」という5つの文法用語は、「maf'ul la-hu」に他の呼称を与える文法家がいる点を除けば、ほぼそのまま保持され続けることになる。また、文法書の全体の構成の中で、これらが隣り合う形で配列されるという伝統も受け継がれていくことになる。一方、maf'ul に類するものに何を含めるのかという点や、それらを取りまく枠組み、文法用語の使用という観点からみると、文法家によっても時代によっても決して均一なものとは言えない。以下では、イブン・アッサッラージ以降の maf'ul の分類の変遷をみていく。

まず、「maf'ul」と「maf'ulに類するもの」の区別を明確にしている文法家は、イブン・アッサッラージと師弟関係でつながるイブン・ジンニーとアルジュルジャーニーぐらいに限られる²⁷⁾。それ以外の文法家は、章立てによってこれら2つの区別がされていることはうかがえるものの、明言している部分は見出せない。maf'ul に関してイブン・ジンニーは、「maf'ul には maf'ul muṭlaq, maf'ul bi-hi, maf'ul fī-hi, maf'ul la-hu, maf'ul ma'a-hu の5種類がある (al-Luma':20)」と述べ、その順序で章を配列する。また、maf'ul に類するものに関しても、「ḥāl, tamyīz, 'istiṭnā', 'asmā' 'inna wa 'aḥawāt-i-hā, 'aḥbār kāna wa 'aḥawāt-i-hā の5種類がある (ibid.:26)」と述べている。もっとも、章の配列については、「asmā' 'inna wa 'aḥawāt-i-hā」と'aḥbār kāna wa 'aḥawāt-i-hāは対格をとる名詞の解説の直前に置かれている。

26) maf'ul muṭlaqが意味するものに関する詳細な考察はLevin 1991参照。

27) イブン・ジンニー (913-1002) は、イブン・アッサッラージの弟子アブー・アリー・アルファーリスィーの弟子。アルジュルジャーニー (d. 1078) は、イブン・アッサッラージの弟子アブー・アリー・アルファーリスィーの従弟であるアブー・アルフサイン・アルファーリスィーの弟子。

アルジュルジャーニーも、アブー・アリー及びアブー・バクル²⁸⁾の言葉であるとして、上述のイブン・アッサッラージと全く同様の分類を紹介している (al-Muqtaṣid I:579) が、『al-‘Awāmil al-Mi’a an-Naḥwiyya』ではmaf‘ūlに類するものを明確に分類していない。

次にmaf‘ūlの5つの下位範疇については、イブン・アッサッラージ以降は大きく変化することはないが、「maf‘ūl la-hu」に他の用語を与える文法家がいる点や、5つの下位範疇を列挙する順序が、13世紀を境に変化する点は注目すべきであろう。

イブン・アッサッラージの弟子の一人²⁹⁾であるアッザッジャージ (az-Zaġġāġi) は、直接イブン・アッサッラージの教えを受け、かつ現存する文法書・教科書を残している数少ない文法家である。『al-Ġumal』もイブン・アッサッラージの『Kitāb al-‘Uṣūl』と同じく10世紀前半に書かれたが³⁰⁾、『Kitāb al-‘Uṣūl』と『al-Ġumal』は全体の構成がかなり異なっており、maf‘ūlの分類においてもイブン・アッサッラージのものを忠実に継承しているとは言い難い。アッザッジャージは「(maf‘ūlは) 5つある。すなわち maf‘ūl muṭlaq, maf‘ūl bi-hi, maf‘ūl fī-hi, maf‘ūl ma’a-hu, maf‘ūl min ‘aġli-hi である。(al-Ġumal:305)」と述べ、5つあることを明言しているものの、「maf‘ūl la-hu」の代わりに「maf‘ūl min ‘aġli-hi」を用いる。また、列挙の順序も4番目と5番目がイブン・アッサッラージのものとは異なる。さらに、「maf‘ūl fī-hiとは ẓarfとḥālである。(ibid.)」として「ḥāl」を「maf‘ūl fī-hi」に含める点でもイブン・アッサッラージとは異なる。『al-Ġumal』には49以上とも120とも言われる注釈が書かれたという説があるが (Versteegh 1995:4)、彼の分類と用語を受け継いだ文法家も多い。たとえば、13世紀のイブン・ウスフルは、同時代の文法家の多くがmaf‘ūl la-huを用いるのに対して、アッザッジャージと同様にmaf‘ūl min ‘aġli-hiを用いる (Šarḥ al-Ġumal II:449, al-Muqarrib:225)。また、16世紀のアッシルビーニー (aš-Širbīnī) もmaf‘ūl la-huとmaf‘ūl min ‘aġli-hiの両方を用いる (Carter 1981:326, 432)。

イブン・アッサッラージのmaf‘ūlの分類を、用語、5種類という数、列挙の順序のどの点においても忠実に受け継ぐ文法書・教科書が現れるのは、むしろ次

28) イブン・アッサッラージを指す。

29) アッザッジャージは自らが直接学んだ文法家の筆頭にアッザッジャージ (az-Zaġġāġi) の名をあげて、「我らが師 (šayḥ-u-nā)」と呼んでいる。7番目にイブン・アッサッラージの名がある (al-‘Īdāḥ: 78-9)。

30) 『al-Ġumal』が書かれた正確な時期は不明であるが、『al-‘Īdāḥ』に言及している部分があり (al-Ġumal: 5)、比較的後期の著作であると考えられる。

の世代のイブン・ジンニーやアルジュルジャーニー以降のことである (al-Luma': 20, al-'Awāmil: 285)。

11世紀から12世紀にかけての代表的な文法書・教科書においては、maf'ulの下位範疇の数を明確に示すものは少なくなる。たとえば、アッザマフシャリー (az-Zamahšārī) の『al-Mufaṣṣal』や、イブン・アルアンバーリー (Ibn al-'Anbārī) の『'Asrār al-'Arabiyya』では、maf'ulの下位範疇の数は明確にされていない。もっとも、maf'ulに関わる章立てはイブン・アッサッラージのものと大きくは変わらない。

13世紀の文法書・教科書からは、maf'ulの分類をする際に、「faḍla」の用語を使った説明が目立ってくる³¹⁾。アルアスタラーバーズイー (al-'Astarābādī) の『Šarḥ al-Kāfiya』は、イブン・アルハージブ (Ibn al-Ḥāḡib) の統語論の文法書『al-Kāfiya』の注釈書であるが、maf'ulをめぐる枠組みの部分に変化がみられる。彼は大きな枠組みとして、以下のように「faḍalāt」と「faḍalātに類するもの」の2つを提示し、8種類ある faḍalāt の中に「5つのmaf'ul (al-maf'ulāt al-ḥamsa 又は al-mafā'il al-ḥamsa)」とその他があるという (Šarḥ al-Kāfiya I: 112-3)。

faḍalāt (①～⑤が5つのmaf'ul)

①maf'ul muṭlaq ②maf'ul bi-hi ③maf'ul fī-hi ④maf'ul la-hu

⑤maf'ul ma'a-hu ⑥ḥāl ⑦tamyiz ⑧'istiṭnā'

faḍalātに類するもの

⑨'ism 'anna ⑩lā at-tabri'a ⑪ḥabar kāna wa 'aḥawāt-i-hā

faḍalātの下位範疇として5つのmaf'ulの解説がなされるという伝統は、それ以降の文法家たちにも採用されてゆくが、13世紀、おそらくはイブン・マリーク (Ibn Mālik) の『al-'Alfiyya』から³²⁾、maf'ulをめぐる章の配列に変化がみられるようになる。そして、この時代以降の主な文法書・教科書はこの配列を採用するようになる。

たとえば、イブン・アキール (Ibn 'Aqīl) の『Šarḥ al-'Alfiyya』では以下のような配列となり、それまでのmaf'ul muṭlaqから始まる配列からmaf'ul bi-hiで始める配列に変わっている。また、用語の使用に関しても、章のタイトルとして

31) “文における最小限の構成要素以外の余剰部分”を意味するfaḍlaの用語は、アルムバッラド以降の文法書に現れる (Carter 1981: 369)。イブン・アッサッラージにも「maf'ulはfaḍlaである (al-'Uṣūl I: 75, 89)」という表現が見られるが、maf'ulの分類及び枠組みの提示に際してはこの用語を使わない。

32) イブン・マリークの『Šarḥ at-Tashīl』における章立ては、maf'ul muṭlaqで始まる従来のものを踏襲する。また、maf'ul la-huの章はない。Šarḥ at-Tashīl II: 107-305

の 'istiṭ nā' は用いられず、mustaṭnā が用いられるようになる。

- ① maf'ul bi-hi ② maf'ul muṭlaq ③ maf'ul la-hu ④ maf'ul fī-hi
⑤ maf'ul ma'a-hu ⑥ mustaṭnā ⑦ ḥāl ⑧ tamyiz

上記のような配列は、14世紀のイブン・ヒシャーム (Ibn Hišām) や15世紀のアッスユーティー (as-Suyūṭī) にも受け継がれてゆく。イブン・ヒシャームは、maf'ul muṭlaq, maf'ul la-hu, maf'ul fī-hi をそれぞれ「2番目のmaf'ul」「3番目のmaf'ul」「4番目のmaf'ul」と呼んで順番を明記している (Qaṭr: 244, 246, 250)。さらに、「私はアッザマフシャリーやイブン・ハージブのように maf'ul muṭlaq から始めることはせず、アルファーリスィー、『al-Muqarrib』の著者、『at-Tashīl』の著者らと同様に maf'ul bi-hi から始める (Šudūr: 177)」³³⁾ と述べている。また、アッスユーティーも「私は faḍalāt の説明を maf'ul bi-hi から始めた。 (Ham' II: 5)」と述べ、maf'ul muṭlaq から始めるのはバスラ学派の方式であるとしている。'istiṭ nā' という用語に関しても、「スィーバワイヒやその後の文法家が章の名称を 'istiṭ nā' としたのとは異なり、イブン・マーリクの『at-Tashīl』と同様に mustaṭnā とした。 (ibid.: 184)」と述べ、自らの文法書での章の配列や用語の使用についての理由を明らかにしている。

なお、「対格をとるもの (maṣṣūbāt)」が15種類あると明記しているものに、イブン・ヒシャームの『Šudūr aḍ-Ḍahab』やアッシルビーニーの『Nūr as-Saḡiyya』 (al-'Āḡurrūmiyya の注釈) がある。これら2書は章の配列に大きな相違が認められる。イブン・ヒシャームは「私はmaf'ulから始めた。なぜならそれが基本となるものだからである。 (Šudūr: 177)」と言い、最初に5つのmaf'ulを配列している点は、他の文法書と大きな違いはない。これに対してアッシルビーニーは、maf'ul bi-hi から始めるものの、maf'ul min 'aḡli-hi を10番目に、maf'ul ma'a-hu を11番目に置き、他のmaf'ulと離して配列している (Carter 1981: 324-448)。これは他の文法書・教科書・解説書には見られない特異な配列であると言える。

7. maf'ul muṭlaqの下位範疇の変遷

以上でみてきたように、イブン・アッサッラージ以降のmaf'ulの分類をめぐる大きな枠組みに関しては、時代によって極めてゆるやかな変化しかせず、13世紀に若干の変化をみた程度だと言えるであろうが、個々のmaf'ul及びそれに類するもの下位範疇を見ると、各文法書に記述されている用語の使用、文法現

33) 『al-Muqarrib』の著者はイブン・ウスフール、『at-Tashīl』の著者はイブン・マーリクを指す。

象を解説するための用例は様々であり、また、各文法事項においてあらゆる用例を網羅しているとも言い難いのも事実である。比較的多くの下位範疇が示される maf'ul muṭlaq を例に、その下位範疇に与えられた呼称の変遷をみてゆく。

イブン・アッサッラージの時代までは、maf'ul muṭlaq の下位範疇を示す用語は充実してはいなかった。彼は、maf'ul muṭlaq が使用される例は、数多くあるとしながら、次の3種類の用法をあげている (al-'Uṣūl I:160)。

- (1) qum-tu qiyām-an.
- (2) ḍarab-tu zayd-an ḍarb-an ṣadīd-an.
- (3) ḍarab-tu ḍarb-at-ayni.

上記(1)–(3)はそれぞれ、「強調 (tawkid) して言う」「ḍarb (殴打) が激しいことを説明する」「回数 (mirār) を示す」と説明され、tawkid と mirār の語が見られるが、ともに文法用語としてではなく、普通名詞として使用していると考えられる。また、アッザッジャージーにおいては、maf'ul muṭlaq の下位範疇を示す用語はみられない (al-Ġumal:44-5, 305)。

しかし、10世紀後半には、後の多くの文法書・教科書に現れる用語がすでに用いられていたことが、イブン・ジンニーの『Kitāb al-Luma' fī an-Nahw』で確認できる。彼は、2つの側面から計5つの用語を用いる。まず、機能的側面から tawkid al-fi'l (又は単に tawkid) / bayān an-naw' (又は tabyīn) / 'adad al-marrāt の3つに分類する。また、形式的側面から、対格をとる動名詞に修飾語等が付くか否かで mubham / muḥtaṣṣ の2つに分類する (ibid.:20-1)。100頁に満たないこの教科書にみられる詳細な分類に匹敵するのは、15世紀後半のアッスユーティーによる1500頁を超える大著『Ham' al-Hawāmi' fī Šarḥ Ġam' al-Ġawāmi'』に見られる記述ぐらいのものであろう (ibid. II:73)。

イブン・ジンニー以降、11世紀から12世紀にかけては、非常に簡略化された記述がされ、2種類に分類するものが多くなる。例えばアルジュルジャーニーはアブー・バクルの言葉の引用であるとして「maṣdar には mubham と muwaqqat の2種類がある」と言い、修飾語等が付く maṣdar については用例をあげてはいるものの、用語を与えていない (al-Muqtaṣid I:581-2)。これと同じようにアッザマフシャリーも mubham と mu'aqqat の2種類しかあげていない (al-Mufaṣṣal:31-2)。これに関連してイブン・ヤイーシュは、動名詞に修飾語等が付く例文を挙げてはいるが、用語を加えていない (Šarḥ al-Mufaṣṣal I:111)。

13世紀から14世紀には次のように3種類に分類するものが多くなる。
イブン・ウスフール: mubham / muḥtaṣṣ / ma'dūd³⁴ (al-Muqarrib:211, Šarḥ Ġumal az-Zaġġāġi I:326-7)

イブン・ハージブ: *li-t-ta'kid/li-n-naw' /li-l-'adad* (Šarḥ al-Kāfiya I:114)

イブン・マーリク: *tawkid/li-bayān an-naw' /li-bayān al-'adad* (それぞれ別名
mubham/muḥtaṣṣ/mu'aqqat) (Šarḥ at-Tashīl II:107)

イブン・ヒシャーム: *tawkid/bayān an-naw' /bayān al-'adad* (Šuḍūr ad-Dahab:184)

以上のように、maf'ul muṭlaqに限って言えば、文法用語の使用が文法家から文法家へと受け継がれ、時代とともに充実していくといったものでは必ずしもない。また、簡潔な教科書より詳細な文法書の方が、用例及び用語が豊富であるというわけでもない。

8. 標準とはなりえなかったmaf'ul

これまで見てきたように、5つのmaf'ulをめぐっては、イブン・アッサッラージ以降、根本的な変化を見ずに受け継がれてきたわけであるが、彼の時代の10世紀までに様々な提案や試みが存在したことも事実である。以下では、標準的な文法書・教科書・解説書に取り入れられることのなかったmaf'ulについてまとめる。

スィーバワイヒは、'iyyā-ka wa-l-'asad-a. の名詞対格を「maf'ul min-hu」と呼ぶ (al-Kitāb I:116)³⁵⁾。このような例文は後の文法書では警告・注意喚起 (taḥdīr) の章で扱われることが多いが³⁶⁾、アルムバッラド以降この用語は現れないし、イブン・アッサッラージ以降のmaf'ulの分類においてもこの種の例文及び用語は採用されなかった。

上記とは別の文法現象に「maf'ul min-hu」の呼称が与えられた例について、イブン・ヒシャームやアッスユーティーが記している (Qaṭr:219, al-'Ašbāh III:75-6)³⁷⁾。

wa-ḥtār-a mūsā qawm-a-hu sab'-īna raḡul-an. [コーラン、高壁の章155節]

(ムーサーは自らの民から70人の男を選んだ。)

この文の qawm-a-hu の対格は min qawm-i-hi と同等であると解釈されることから

34) イブン・ウスフルは、zarf az-zamānやzarf al-makānにもこれらの語を適用して3種類に分類する。
al-Muqarrib:211-2.

35) 頁はDerenbourg版によるが、Hārūn版 (pp. 273-4) ではmaf'ul min-huの用語は欠落している。この用語は『al-Kitāb』に1箇所しか用いられない (Mosel 1975:253)。後の文法書に採用されなかった点についてはCarter 1981:447, Owens 1990a:161, 1991:231に言及がある。

36) 例えば、al-Muqtaḍab III:212-3, al-Mufaṣṣal:48-9, 'Asrār:168-70, Šarḥ al-Kāfiya I:180-3, Ham' II:17-9などにもmaf'ul min-huの用語はみられない。

37) イブン・ヒシャームもアッスユーティーも、6つ目のmaf'ulとしてmaf'ul min-huを加えたのはアッスィーラーフィー ('Abū Sa'id as-Sirāfi) であるとしている。

maf'ul min-hu と名づけられたが、この用語も主な文法書から除外されている。コーランのこの用例については、スィーバワイヒ (al-Kitāb I:12)、アルムバッラド (al-Muqtaḍab II:321, 342, IV:330)、イブン・アッサッラージ (al-'Uṣūl I:178) などにも引用があるが、maf'ul min-huの用語は与えられていない。

上記以外にも、maf'ulの分類をめぐる様々な見解が提示されていた。たとえば、「az-Zağğāğ は maf'ul ma'a-hu を maf'ul bi-hi に含める (Qaṭr:219)」³⁸⁾ 「クーファ学派はmaf'ul la-huをmaf'ul muṭlaqに含める (ibid.)」 「クーファ学派はmaf'ul bi-hiのみがmaf'ulであり、残りはmaf'ulに類するものであると主張 (Ham' II:6)」などがある。

また、用語についても³⁹⁾、次のような記述がある。「アルジャウハリ (al-Ġawharī) は mustaṭnā の代わりに maf'ul dūna-hu と呼ぶ。 (Qaṭr:219)」

以上にあげた maf'ul がイブン・アッサッラージによって採用されなかった理由については、スィーバワイヒやアルムバッラドの文法用語をイブン・アッサッラージが継承し、他の用語を排除したという事実から説明はつくであろう。しかし、スィーバワイヒが「maf'ul min-hu」と呼んだものが採用されなかった理由については不明である⁴⁰⁾。

9. おわりに

スィーバワイヒやアルムバッラドの時代には必ずしも十分であったとは言えない「maf'ul」及び「maf'ulに類するもの」の分類は、10世紀のイブン・アッサッラージの時代になってようやく明確な表現や充実した文法用語によって、その後の標準となる考え方や章立てのモデルが形成された。そして、それ以降のアラブ文法は、一見大きな変化を見ることなく継承されてきたかに見える。たとえば、maf'ulには5つの下位範疇があるという点は、ほとんどの文法書・教科書に明言されている。『al-Mufaṣṣal』や『'Asrār al-'Arabiyya』のように明確に示されていないものでも、章立てから下位範疇の数は読み取れる。さらに、「maf'ul muṭlaq」「maf'ul bi-hi」「maf'ul fī-hi」「maf'ul la-hu」「maf'ul ma'a-hu」という文法用語についても、アッザッジャージーなどの一部の文法家を除けば、一貫し

38) アッザッジャージーの統語論を扱った文法書は失われてしまったと考えられており、原典で確認することはできない。

39) 後の時代においても、標準的な文法書に採用されなかった用語がみられる。イブン・マンズール (Ibn Manẓūr) は、'alaw-tu s-saḥḥ-aの対格をmaf'ul 'alay-hiと呼ぶ。また、maf'ul muṭlaqの代わりにmaf'ul bi-lā ṣīlaを使う (Lisān XIV:44)。

40) maf'ul ma'a-huが採用されたことを考慮すると、使用頻度の少なさから説明するのは困難であると思われる。

て使用され続け、標準的な用語として定着した。

しかし、一方で、時代とともに変化した点があるのも事実である。たとえば、maf'ulの下位範疇の列挙の順序が、13世紀を境に「maf'ul muṭlaq, maf'ul bi-hi, maf'ul fī-hi, maf'ul la-hu, maf'ul ma'a-hu」から「maf'ul bi-hi, maf'ul muṭlaq, maf'ul la-hu, maf'ul fī-hi, maf'ul ma'a-hu」に変わり、これに伴って章立ても変化する。また、10世紀から11世紀にかけては「maf'ul」と「maf'ulに類するもの」がそれぞれ5つの下位範疇があるという枠組みが提示されたが、それ以降は「maf'ulに類するもの」の下位範疇は明確に示されなくなっていく。そして、13世紀ごろからは「faḍalāt」と「faḍalātに類するもの」の枠組みに改編されて、8つの「faḍalāt」の中に5つのmaf'ulがあるとの説明が一般的になる。

アラブ伝統文法の歴史の中で、「maf'ul」及び「maf'ulに類するもの」の分類に関しては、10世紀と13世紀に比較的大きな転換点があったと言えるであろう。

[参考文献]

[アラビア語原典]

- al-'Astarābādī, Raḍī ad-Dīn Muḥammad ibn Ḥasan. *Šarḥ Kāfiya Ibn al-Ḥāḡib*. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1969.
- al-Ġurġānī, 'Abū Bakr 'Abd al-Qāhir ibn 'Abd ar-Raḥmān. *al-'Awāmil al-Mi'a an-Naḥwiyya*. Ed. by al-Badarāwī Zahrān. al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif, n.d.
- al-Ġurġānī, 'Abū Bakr 'Abd al-Qāhir ibn 'Abd ar-Raḥmān. *Kitāb al-Muqtaṣid fī Šarḥ al-'Iḍāḥ*. Ed. by Kāzim Baḥr al-Mar'āh. 2 vols. Baġdād: Wizārat aṭ-Ṭaqāfa wa al-'Ilām, 1982.
- Ibn al-'Anbārī, 'Abū al-Barakāt 'Abd ar-Raḥmān ibn Muḥammad. *Asrār al-'Arabiyya*. Ed. by Muḥammad al-Biṭār. Dimašq: al-Maġma' al-'Ilmī al-'Arabī, 1957.
- Ibn al-'Anbārī, 'Abū al-Barakāt 'Abd ar-Raḥmān ibn Muḥammad. *al-'Inṣāf fī Masā'il al-'Hilāf bayna an-Naḥwiyyīn al-Baṣriyyīn wa al-Kūfiyyīn*. Ed. by Muḥammad Muḥyi ad-Dīn 'Abd al-Ḥamīd. al-Qāhira: Dār al-Fikr, n.d.
- Ibn 'Aqīl, Bahā' ad-Dīn 'Abdullāh. *Šarḥ al-'Alfiyya*. Ed. by Muḥammad Muḥyi ad-Dīn 'Abd al-Ḥamīd. 2 vols. al-Qāhira: Dār at-Turāṭ, 1998.
- Ibn Ġinnī, 'Abū al-Faṭḥ 'Uṭmān. *Kitāb al-Luma' fī an-Naḥw*. Edité et annoté par Hadi M. Kechrida. Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1976.
- Ibn Hišām, Ġamāl ad-Dīn 'Abū Muḥammad 'Abdullāh ibn Yūsuf. *Qaṭr an-Nadā wa Ball aṣ-Šadā*. Ed. by Muḥammad Muḥyi ad-Dīn 'Abd al-Ḥamīd. Bayrūt: al-Maktaba al-'Aṣriyya, 1988.
- Ibn Hišām, Ġamāl ad-Dīn 'Abū Muḥammad 'Abdullāh ibn Yūsuf. *Šuḍūr ad-Dahab*. Ed. by Muḥammad as-Sa'di Farḥūd. Bayrūt: Dār al-Kitāb al-Lubnānī, 1999.
- Ibn Manzūr, 'Abū al-Faḍl Ġamāl ad-Dīn Mukarram. *Lisān al-'Arab*. 20 vols. al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif, n.d.
- Ibn as-Sarrāġ, 'Abū Bakr ibn as-Sarī. *al-'Uṣūl fī an-Naḥw*. Ed. by 'Abd al-Ḥusayn al-Fatli. Bayrūt: Mu'assasa ar-Risāla, 1985.
- Ibn 'Uṣfūr, 'Abū Ḥasan 'Alī. *al-Muqarrib*. Ed. by 'Ādil 'Aḥmad 'Abd al-Mawġūd. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1998.

- Ibn 'Uṣfūr, 'Abū Ḥasan 'Alī. *Šarḥ Ġumal az-Zağğāgī*. Ed. by Šāhib 'Abū Ġanāh. 2 vols. Bağdād: Dār al-Kutub li aṭ-Ṭibā'a wa an-Naṣr, 1980.
- Ibn Ya'īs, Muwaffaq ad-Dīn. *Šarḥ al-Mufaṣṣal*. 10 vols. Bayrūt: 'Ālam al-Kutub, n.d.
- al-Mubarrad, 'Abū al-'Abbās Muḥammad ibn Yazīd. *al-Muqtaḍab*. Ed. by Muḥammad 'Abd al-Ḥālīq 'Uḍayma. 4 vols. Bayrūt, 'Ālam al-Kutub, n.d.
- Sībawayhi, 'Abū Bišr 'Amr ibn 'Uṭmān. *al-Kitāb*. (Le livre de Sībawaihi) Éd. par Hartwig Derenbourg. 2 vols. Paris, 1881-1889 [réimpr. Hildesheim, 1970]
- Sībawayhi, 'Abū Bišr 'Amr ibn 'Uṭmān. *al-Kitāb*. Ed. by 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. 5 vols. al-Qāhira: Maktaba al-Ḥānḡī, 1988.
- as-Suyūṭī, Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *al-'Ašbāh wa an-Naẓā'ir fī an-Naḥw*. 4 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1984.
- as-Suyūṭī, Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *Buğya al-Wu'āt fī Ṭabaqāt al-Luğawiyyīn wa an-Nuḥāt*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. 2 vols. Bayrūt: al-Maktaba al-'Aṣriyya, n.d.
- as-Suyūṭī, Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *Ham' al-Hawāmi' fī Šarḥ Ġam' al-Ġawāmi'*. Ed. by 'Aḥmad Šams ad-Dīn. 4 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1988.
- Yāqūt, Šihāb ad-Dīn 'Abū 'Abdullāh. *Mu'ğam al-'Uḍabā'*. 5 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1991.
- az-Zağğāgī, 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *al-Ġumal*. Éd. par Mohammed Ben Cheneb. Paris: Klincksieck, 1957.
- az-Zağğāgī, 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *al-'Iḍāḥ fī 'Ilal an-Naḥw*. Ed. by Māzin al-Mubārak. al-Qāhira: Dār an-Nafā'is, 1996.
- az-Zamaḥṣārī, 'Abū al-Qāsim Maḥmūd ibn 'Umar. *al-Mufaṣṣal fī 'Ilm al-'Arabiyya*. Bayrūt: Dār al-Ġil, n.d.

[二次資料]

- Bernards, M. (1997) *Changing Traditions. Al-Mubarrad's Refutation of Sībawayh and the Subsequent Reception of the Kitāb*. Leiden: E.J. Brill.
- Bohas, G. & et al (1990) *The Arabic Linguistic Tradition*. London: Routledge.
- Carter, M.G. (1972) " 'Twenty Dirhams' in the Kitāb of Sībawaihi". *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. XXXV pp.485-496.
- Carter, M.G. (1981) *Arab Linguistics. An Introductory Classical Text with Translation and Notes*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Carter, M.G. (1990) "Arabic Grammar" in: Young, M.J.L., Latham, J.D. and Serjeant, R.B. eds. *Religion, Learning and Science in the 'Abbasid Period*. New York: Cambridge University Press. pp. 118-138.
- Ḍayf, Šawqī (n.d.) *Ṭağdīd an-Naḥw*. al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif.
- Fleisch, H. (1979) "Ibn al-Sarrādj". *The Encyclopaedia of Islam*. New Edition. Vol. III p.930.
- Ibnu Hijaṃ (Traduit par Goguyer, A.) (1887) *La pluie de rosée. Traité de flexion et syntaxe*. Leyde: E.J. Brill.
- Jahn, G. (1895-1900) *Sībawaihi's Buch über die Grammatik*. Berlin, rpt. Hildesheim, 1969.
- Levin, A. (1979) "The Meaning of ta'addā al-fī 'ilā in Sībawayhi's al-Kitāb". *Studia Orientalia Memoriae D.H. Baneth Dedicata*. Jerusalem. pp.193-210.
- Levin, A. (1991) "What is Meant by al-maf'ul al-muṭlaq?" Alan S. Kaye ed. *Semitic Studies: In Honor of Wolf Leslau on the Occasion of his eighty-fifth Birthday November 14th, 1991*.

Volume II. Wiesbaden, pp. 919-926.

- Mosel, U. (1975) *Die syntaktische Terminologie bei Sibawayh*. Dissertation, Universität München.
- Owens, J. (1988) *The Foundations of Grammar. An Introduction to Medieval Arabic Grammatical Theory*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Owens, J. (1989) "The Syntactic Basis of Arabic Word Classification". *Arabica* XXXVI pp.211-234.
- Owens, J. (1990a) *Early Arabic Grammatical Theory. Heterogeneity and Standardization*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Owens, J. (1990b) "Themes in the Development of Arabic Grammatical Theory" Versteegh, K. and Carter, M.G. eds. *Studies in the History of Arabic Grammar II*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing, pp.253-263.
- Owens, J. (1991) "Models for Interpreting the Development of Medieval Arabic Grammatical Theory". *Journal of the American Oriental Society*. Vol. 111. Number 2. pp.225-238.
- Peled, Y. (1999) "Aspects of the Use of Grammatical Terminology in Medieval Arabic Grammatical Tradition". Yasef Suleiman ed. *Arabic Grammar and Linguistics*. Curzon. pp.50-85.
- Taha, Z.A. (1995) *Issues of Syntax and Semantics: A Comparative Study of Sibawayhi, Al-Mubarrad and Ibn As-Sarraj*. The Doctoral Dissertation, Georgetown University.
- Troupeau, G. (1962) "La grammaire à Baġdād du IX^e au XIII^e siècle". *Arabica*. Volume spécial. Publié à l'occasion du mille deux centième anniversaire de la fondation de Baġdād. pp.397-405.
- Troupeau, G. (1976) *Lexique-Index du Kitāb de Sibawayhi*. Paris: Klincksieck.
- Troupeau, G. (1983) "Les 'Partes Orationis' dans le Kitāb al-'Uṣūl d'Ibn al-Sarrāj" Versteegh, C.H.M., Koerner, K. & Niederehe, H.-J. eds. *The History of Linguistics in the Near East*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing, pp.143-152.
- Versteegh, C.H.M. (1977) *Greek Elements in Arabic Linguistic Thinking*. Leiden: E.J. Brill.
- Versteegh, C.H.M. (1995) *The Explanation of Linguistic Causes. Az-Zaġġāġī's Theory of Grammar*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Wright, W. (1896-1898) *A Grammar of the Arabic Language*. 2 vols. 3rd revised edn. rpt. Cambridge University Press, 1981.
- Yūsuf, M.I. (2000) *al-Ġuhūd al-Luġawiyya li Ibn as-Sarrāġ*. al-Qāhira: Dār al-Kutub al-Miṣrī.
- 岡崎英樹 (1994) 「受動文の主語をめぐるアラブ文法家の記述について」『外国語・外国文学研究』17. pp.15-24.